

# 土門剛



土門剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

## 統計部の作況指数を逆読みすれば 福徳利運間違いなし

の2カ月で181mmしか降っていない。昨年の3分の1しかない。平年値（1981年〜2010年）でも半分程度の降雨量だった。気温も例年になく高温で、30℃を越す日が9月14日から19日まで連続6日間も続いた。とくに17、18の両日は35℃を越す猛暑日だった。9月に猛暑日を記録したのは、後にも先にもこれが初めてのことでないかと思う。平年値（同）との比較でも、8月で1・9度、9月で4度と群を抜いて高かった。

これだけ気象の悪条件が重なれば、稲の生育に重大な影響を与えることは、常識で考えても分かるはずだ。湯沢・雄勝地区でコメの検査もやっている仲間の大規模生産者は、農水省公表の作況指数は「信用ができない」と前置きしてこう語る。

「水が足りた田圃の稲は平年作だが、水が使えなかった田圃の稲は、平年に比べて半俵から1俵は収量が落ちた。とくに雨の少なかった内陸部はひどかった。身が細くて収量が少ない上、品質も悪かった。一目見

て収量が落ちていることが分かる」秋田の作況指数は、東北農政局秋田地域センターが調査した。地域センターは、昔の統計事務所が、農政事務所などと統合して11年9月から発足した地方組織で、旧統計事務所の業務を受け継いだのは生産統計チームだ。県内380カ所の圃場で調査する。同センターがまとめた10月15日時点の「作柄概況」には、このような記述がある。

「【全もみ数】5月下旬から6月上旬にかけておおむね高温・多照で経過したこと等により穂数は『平年並み』となったものの、弱小穂がややくみられること等により1穂当たりもみ数が『少ない』ことから、全もみ数（穂数×1穂当たりもみ数）は『やや少ない』となった。【登熟】穂ばらみ期及び出穂期以降おおむね高温・多照で経過したこと等から登熟は平年に比べて『やや良』と見込まれる。」

この記述を読んで、同センターに電話をかけてみた。応対に出てくれた担当者、現場の実態と違うと指

農水省統計部の生産流通消費統計課が10月30日に公表した「同15日現在の作況指数と予想収穫量」の統計――。違和感を覚えたのは、10a当たり予想収穫量が、全国ベースで前月より1kgも増えていることだった。とりわけ東北主産地で独り負け的状况に陥っている秋田県が、作況指数こそ「100」と前月（9月15日現在）公表の数字と同じだったものの、予想収穫量が前月より2kgも増えている。

### 高温障害で水不足でも平年作

秋田県の作柄は、前月公表以降にさらに悪化していた。仲間たちが頻

繁に現場レポートを送ってくれた。

「9月20日を過ぎた頃から、高温障害で稲が弱っていたのは誰の目にも明らかだった。秋田では9月には珍しく2日連続して35℃を越す日があった。この影響をモロに受けたようだ。しかも、8月中旬から雨が少なく、田圃は水不足に陥っていた。例年なら、9月10日頃が刈り取りのピークになるのに、今年はそのがスタートだった。最初の刈り取り分は、まずまずだったが、それ以降はあまり出来が良くない」

確かに8月と9月の2カ月は降雨量が少なかった。五城目町の気象庁観測ポイントをみれば、今年、そ

摘したら、こう答えてきた。

「8〜9月が高温で日照量に恵まれたため登熟が進み、刈り取りが早まりました。一等米比率は昨年よりわずかに落ちていますが、ふるい目幅別の重量分布でも、2・0mm以上が86・1%もありました。対平均差(過去5年の平均値)8・3%のアップでした」

秋田の稲作に決定的な悪影響をもたらした季節外れの異常高温も、彼らにかかると、品質向上をもたらしものだと総括している。現場の報告と真逆の総括には、ただただ呆れるばかりだが、出先機関の職員は、稲を観る目も植物生理の基本的知識も欠けるというのが筆者の見方である。

それに加えて作柄調査の対象圃場の選び方にも問題がある。統計部は、無作為抽出と説明するが、実態は栽培技術がしっかりした篤農家を中心にした調査であろう。これだと数字は必ず高めにでてくるものである。

作況指数を担当する生産流通消費統計課は、12年産から水稲収穫量調査の結果をふるい目幅別に公表することにした。作況指数に疑念を抱くのは、何も筆者だけではない。省外だけでなく、省内にも「作況指数はアテにならない」という声なき声は厳然とあり、ふるい目幅別の数字を

公表することで批判に答えようとしたのである。

統計部が収穫量を調べる際には1・7mmのふるい目幅を基準としている。一方、生産流通現場では1・85mmや1・9mmが一般的だ。統計部の言い分は、作況指数が高めになるのは、収量が多くなる1・7mmのふるい目幅を使っているからというもので、10月9日付け日本農業新聞は、「同省が収穫量調査で1・7mmのふるい目幅を基準とするのは、ふるいから落ちた粒の小さい『ふるい下米』の相当量が低価格の主食用の精米原料などとして流通しており、『ふるい下米』を含めた収穫量を示さないとコメの需給調整の判断を誤ると考えているため」と解説している。

これは素人騙しのレトリックにすぎない。確かにふるい目を1・85mmや1・9mmに広げれば、収穫量は落ちる。統計部は、11年産の場合、1・7mmのふるい目で量ると840万tになり、1・85mmなら38kg、1・9mm 64kgに収穫量が増えると試算表のようなものを公表してきたが、説得力に欠ける。1・85mmや1・9mmのふるい目を使うマーケットは、作況指数の判断には、あくまで主食として流通する1・7mmのふるい目で選別したものも対象にしているからだ。

## 実態を反映せぬ 平年収量

作況指数は、「10a 当たり平年収量」を分母に「10a 当たり予想収量」を割ったものである。従って、分母、分子とも正しい数字でない

表1 全国と岩手県の平年収量と作況指数

| 西暦   | 全国        |      | 岩手県       |      |
|------|-----------|------|-----------|------|
|      | 平年収量 (kg) | 作況指数 | 平年収量 (kg) | 作況指数 |
| 2002 | 522       | 101  | 526       | 100  |
| 2003 | 524       | 90   | 527       | 73   |
| 2004 | 525       | 98   | 531       | 102  |
| 2005 | 527       | 101  | 533       | 101  |
| 2006 | 529       | 96   | 533       | 98   |
| 2007 | 529       | 99   | 533       | 99   |
| 2008 | 530       | 102  | 533       | 101  |
| 2009 | 530       | 98   | 533       | 100  |
| 2010 | 530       | 98   | 533       | 104  |
| 2011 | 530       | 101  | 533       | 102  |
| 2012 | 530       | 102  | 533       | 105  |

と、正しい作況指数をはじき出すことはできない。生産流通消費統計課が扱う。これが作況指数を狂わせる大きなファクターになることは、あまり知られていない。まずは農水省の説明を読んでいただきたい。

「稲の栽培を開始する以前に、その年の気象の推移や被害の発生状況等を平年並みとみなし、最近の栽培技術の進歩の度合や作付変動等を考慮し、実収量のすう勢を基にして作成されたその年に予想される10a 当たり収量をいい、作柄の良否を表す作況指数の基準となっています」

時系列で整理してみよう。10a 当たり平年収量は3月中旬にまとめられる。作柄概況は7月から11月まで各月15日現在で公表される。作況指数は9月15日現在からの公表となる。10a 当たりの予想収量は、作柄概況8月分からの公表となる。その

予想収量に作付面積を掛けたものが予想収量であり、それを平年収量で割り戻したのが、作況指数となる。従って、平年収量は作況指数をはじき出すだけでなく、これら水稲作況調査は、農政上とても重要な数字になると認識していただきたい。戸別所得補償制度における交付金単価の算定や、農作物共済事業における共済基準単収の算定に、平年収量が使われることは前回説明した通りである。

全国と岩手県の平年収量を表1で示しておいた。岩手県を取り上げたのは、統計部が平年収量算定式の欠陥を証明するのに、格好の例と思ったからだ。

全国も岩手県も同じ数字が続くとレンドだが、後者は8年連続で533kgだ。奇異な印象を受けるのは、筆者だけではないと思う。

# 土門 辛聞

栽培技術指導方針は、稲作農家に対する都道府県の「栽培技術指導方針」をそのままコピーしただけのこと

表2 岩手県の「生産事情」(農水省統計部)

| 年産     | 生産事情   |
|--------|--|
| 2008年産 | 「ひとめぼれ」(約6割半)、「あきたこまち」(約2割弱)を中心とする品種構成に大きな変化はない。適地適品種の作付けを図り、高品質・良食味米の安定生産を推進している。   |
| 2009年産 | 「ひとめぼれ」(約6割半)、「あきたこまち」(約2割弱)を中心とする品種構成に大きな変化はない。適地適品種の作付け、高品質・良食味米の安定生産が推進されている。   |
| 2010年産 | 「ひとめぼれ」(約6割半)、「あきたこまち」(約2割弱)を中心とする品種構成に大きな変化はない。適地適品種の作付け、高品質・良食味米の生産が推進されている。   |
| 2011年産 | 「ひとめぼれ」(約6割半)、「あきたこまち」(約2割弱)を中心とする品種構成に大きな変化はない。適地適品種の作付け、高品質・良食味米の安定生産が推進されている。   |
| 2012年産 | 【品種構成等】「ひとめぼれ」、「あきたこまち」を中心とする品種構成に大きな変化はない。【栽培技術指導方針】○良質・良食味米の安定生産及び低温障害回避のため、適期移植 ○環境への負荷を抑えるため、慣行栽培よりも農業使用回数の低減、堆肥等の有機物投入の土作り、基本技術の励行の指導が行われている。 |

されはさておき、いかなる判断でこのような結果になったか、それを裏付けるバックデータのようなものとして、統計部は毎年3月中旬に開催する委員会で年産ごとに「生産事情」と題した簡単な資料を作成する。ホームページで確認できた分をまとめておいた(表2)。

毎年、コピーしたかのような文章が並んでいる。ただ12年産から「栽培技術指導方針」が加わっている。筆者の推測では、作況指数が実態を反映していないという省内外の批判をかわすべく、先のふるい目幅別の水稲収穫量の公表とセットで打ち出してきたもの

である。それが現場で実践されているかどうかは何の検証もない。それでも「平年収量」の算定要素に加えてきたのは、いかにも無責任ぶりを露呈した統計部らしい仕事ぶりではないか。

筆者なりに岩手県の栽培技術指導方針を検証してみた。その前に岩手の品種構成だが、10年前とほぼ変わっていない。ひとめぼれとあきたこまちの2品種が7割近くを占める。残りは、たかねみのり、どんぴしゃ、かけはし、ササニシキなどだ。どれも多くて5、6%しかなかった。従って、11年産までの「生産事情」が、

判で押ししたような記述になり、その結果として平年収量が8年連続の同じ数字になるのは、そのためだったのであろう。

さて栽培技術指導方針だ。岩手県庁は、ここに列挙していることをお題目のように唱えてきた。だが現場は、それとは真逆のことが起きている。有機物の投入とは、聞こえはよいが、未熟堆肥を投入し、十分な技術もないまま発酵鶏糞を使わせているのが現状。それが確実に根を傷め減産要因を招いている。プロ生産者の見立てでは、収量が最低でも半俵(30kg)程度は落ちていくという。現場でこれを指摘する声はない。

その「生産事情」で抜け落ちているものがある。農家の構造的な質の劣化だ。生産基盤の劣化という呼び方もある。まず高齢化の進行による生産技術の低下が思い浮かぶ。次いで長年の米価低迷による生産意欲の低下もある。これに岩手には特殊事情が絡む。集落営農組織の普及だ。これは確実に生産力の低下を招いている。70歳に近い高齢農家が、いきなり20haや30ha規模の稲作に取り組んでいる姿をイメージしていただければ、事情はお分かりいただけよう。

統計部の「生産事情」は、それらをことごとく無視して、すべてが期待願望にもとづく要因を何の検証も

せず積み上げただけで、10a当たりの平年収量を算定している。作況指数の数字が、常に高めになるのは、統計部のそうした結果によるものである。それが戸別所得補償交付金単価や農作物共済基準単収の算定に使われたら納税者はたまったものではない。

筆者版「相場の格言」で本稿を締め括りたい。

「統計部の作況指数が低目に出てきた時は、儲からないが、高目に出てきた時は、儲かる」

世間には、統計部が公表する作況指数を信用して、売り急ぐ輩がやたら多いと聞く。江戸時代のコメ商人、本間宗久なら、「この法(格言)にしたがって、売り買い致すときは、福徳利運にして、損するということなし。大切に心得、秘蔵すべし、慎むべし、秘すべし」(相場三味伝)と解説してくれるに違いない。統計部の統計はそのままよし、統計の裏を読む法こそ、福徳利運に通じる道であるから、これ以上の解説はやめておけということになるか。

※

作況指数や平年収量をテーマにした勉強会を11月28日(木)に開きます。ご興味ある方は、「参加資料送れ」と bunshof@gmail.com (主催/土門剛) までご連絡ください。